啓蟄

蟄虫啓戸

すごもりのむしとをひらく

蟻出でておもひおもひの道選ぶ

―― 福永耕二

「啓蟄」を詳しくいったもので、意味は同じです。「蟄虫」は冬ごもりをしている虫、蛇や蛙なども含めた小さな生き物をさします。「啓」は開くこと。まるで、家の戸を開いて顔を出したような表現です。小さな命にもあたたかいまなざしを注いでいたことが感じられるようです。

3月05日_09日

【啓蟄 初候】

※季節の風物詩

土筆 つくし ―草―

陽気に誘われるようにして、土の上にかわいい顔をのぞかせる「土筆」。昔から親しみをこめて「土筆坊」と呼ばれてきました。「杉菜」の胞子茎ですが、緑の杉菜が生える前に出てきます。摘み取って、はかまを除き、佃煮や和えものにして食べるのもこの時期ならではの楽しみです。

猫柳 ねこやなぎ ―花―

茶色い殻の下が割れると、そこから銀色のふわふわした毛があらわれます。あたたかくくるまれた芽のようですが、これが「猫柳」の花なのです。猫のしっぽに見たてての命名だといわれますが、しっぽにしては少し短いようです。でも、毛並は猫のよう。思わずなでてみたくなりますね。

玉筋魚 いかなご ―魚―

夏になると突然姿を消すので「如何な魚(何という魚だろう)」と不思議がったところから「いかなご」になったという説もあります。じつは、冬眠ならぬ夏眠をするのだとか。

解禁後間もない時期の、小さな「新子」で作る釘煮は早春の風物詩です。

桃始笑

ももはじめてさく

桃が咲き始めるころです。

桃といえば、三月三日の桃の節句ですね。現代の暦では少し早いようですが、旧暦ですとちょうど花の盛りだったことでしょう。

桃は、枝にそってたくさんの花をつけるので、子孫繁栄の象徴として神聖視されてきました。

梅や桜と似ていますが、梅は花びらの先がまるく、桜は割れているのに対して、桃はとがっています。とはいえこの時期は、杏、英桃、海棠など、よく似た花が次々と咲いていく時期。昔は花が咲くことも「笑う」「笑む」といいました。どの花もみんな美しく笑っています。

春の園紅にほふ桃の花
下照る道に出で立つ娘子

―― 大伴家持

3月10日_14日

【啓蟄 次候】

※季節の風物詩

馬酔木 あしび ―花―

「あせび」ともいいます。馬が木の葉を食べると、酔って足がなえてしまうところから、「足潽」「足しびれ」などが変化してこの名になったといわれます。小さな白い壺状の花をたわわにつけ、こぼれんばかりに咲く馬酔木。万葉人はこの花を、あふれる恋の思いや繁栄の象徴として歌に詠みました。

菫 すみれ ―花―

菫は、古くから世界中で愛されてきた花です。ゆかしい紫の花びらと、飾り気のない姿。うつむき加減に恥らう様子が人々の心をとらえるのでしょう。いかにもか弱そうなのに、とても強く、都会の道端でも咲いています。また、返り咲きすることも多く、冬でも見かけます。そんなところがまた魅力なのですね。

若布 わかめ ―海藻―

「め」は食用になる海藻の総称で、とくに「若布」をさしました。「和布」とも書くように、やわらかく、採取しやすいので、古くから食べられてきたようです。干し若布などで年中食べられますが、生の若布は春が旬です。

菜虫化蝶

なむし ちょうとなる

菜の花の
化したる蝶や
法隆寺
―福永耕二

青虫が羽化して、紋白蝶になる時期です。「菜虫」は菜を食べる虫ということで、青虫、つまり、紋白蝶の幼虫をさします。

幼虫から蛹になり、成虫になってはばたくまで、劇的に姿を変えていく蝶。「夢見鳥」「夢虫」などの異名も持っています。紋白蝶のほかにも、色とりどりの種類の蝶が舞い始める季節。どの蝶も夢を見ながら飛んでいるようです。

3月15日_19日
【啓蟄 末候】

※季節の風物詩

菜種梅雨 なたねづゆ ―兆し―

「菜種」は油菜のこと。種から良質の油が採れるのでこう呼ばれます。「菜」は食用にする草の総称。その代表が、この花だったことから「菜の花」という名でも親しまれています。

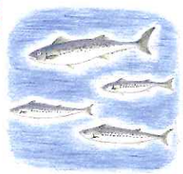
菜の花が咲くころに降る長雨が「菜種梅雨」。青空に映える花なのにと思うと、長雨が実際以上に長く感じられます。

蒲公英 たんぽぽ ―花―

小さなお日様のような黄色い花と、ふんわりとした綿毛が蒲公英の魅力ですね。綿毛を吹いて、遊んだ思い出を持っている人も多いことでしょう。種はひとつの花に二百もあるそうです。たくさんの夢もいっしょに運んでいくのですね。

鰆 さわら ―魚―

魚偏に春と書きますが、美味しいのは「寒鰆」だともいわれます。鰆は、鰤と同じように出世魚。大きくなるに従って、狭腰→柳→鰆と名前が変わります。柳は「柳腰」という意味で、鰆も「狭腹」が変化したものだとか。名前のとおり、出世してもお腹が出ない魚なのです。あやかりたい人が多いのでは……。



春分

雀始巣

すずめはじめて すくう

雀が巣を作り始める時期です。

いつも身近にいる雀。稲穂をついばむことから、農家に嫌われたものですが、子育てをする春から夏は、害虫を食べてくれるありがたい鳥です。

ところが、近年、数が減っているそうです。屋根瓦の下など、雀が巣を作るすき間がなくなったのが原因だとか。

この時期、雀が隠れるほどに草がのびることを「雀隠れ」といいます。若草の間で雀がかくれんぼ。そんな情景をいつまでも見られますように……。

たべのこしし
飯つぶまけば
うちつどふ
雀の子らと
日向ぼこする
―若山牧水

3月20日_24日
【春分 初候】

※季節の風物詩

彼岸潮 ひがんじお ―景色―

春と秋の彼岸のころ、一年で一番干満の差が大きくなります。潮の流れも最も早くなるので、うず潮見物には最適のシーズンです。普通、単に「彼岸潮」というと、春の季語。大きく潮の引いた浜で、潮干狩りを楽しむ季節でもありますね。

辛夷 こぶし ―花―

葉の出ないうちに、白い花を枝先にたくさんつける辛夷の花。蕾、あるいは実が握りこぶしに似ているのでこの名がついたといわれます。

白木蓮とそっくりですが、少し小ぶりで、花の下に小さな葉っぱをつけている方が辛夷です。地方によっては、この花が、田打ち作業を始める目安にされました。

蕨 わらび ―山菜―

春の代表的な山菜としておなじみですね。「童手振」が変化したという語源説もあるように、先がくるりと巻いていて赤ちゃんの握りこぶしのようです。

若芽は「早蕨」と呼ばれ、古くから食用とされてきました。根からとれる澱粉で「蕨餅」を作ります。

桜始開

さくら はじめてひらく

3月25日_29日
【春分 次候】

桜ばないのち
一ぱいに咲くからに
生命をかけて
わが眺めたり
— 岡本かの子

いよいよ桜が咲く時期です。
花といえば桜をさすほど、桜が大好きな日本人。この時期、「花冷え」「花曇」「桜雨」「花嵐」など、お天気を見るときも桜と重ねて考えてしまいます。咲いている桜だけでなく、散りゆく桜も愛でられてきました。「花吹雪」「桜嵐」「飛花」また、水面に落ちて流れていく桜は「花筏」と呼ばれます。「夢見草」は桜の異名。桜とともに夢を見、桜に思い出を重ねる時期です。

※季節の風物詩

桜鯛 さくらだい —魚—

「桜鯛」という名の鯛もいるのですが、普通は春の「真鯛」をさします。桜の咲くころ、産卵のために内海の浅瀬に群がってくるので、こう呼ばれてます。色も赤味を増し桜色。それにしても秋は「紅葉鯛」、冬は「寒鯛」。さすが魚の王。どの季節も称賛されます。

柳 やなぎ —木—

普通、柳というと「枝垂柳」。そのしなやかな風情が愛されてきました。とくに、芽吹きのころの美しさは格別です。「柳は緑、花は紅」といえば、自然のままであること。また春の美しい景色を形容するときにも用います。

片栗 かたくり —花—

古名は「堅香子」。傾いた籠のように、赤紫色の花が下向きに咲きます。この「かたかご」が変化して「かたこゆり」となり、さらに「片栗」となったようです。現在「片栗粉」として売られているのは、ほとんどがじゃが芋の澱粉だとか。
花が枯れた後、次の春まで地上からすっかり姿を消します。

雷乃発声

かみなりすなわち こえをはっす

雷や
あとかたもなき
怒りかな
— 山田みづえ

雷が鳴り始める時期ということです。
雷は一年中鳴るのですが、このころから夏に向かって増えていきます。
その年初めて鳴る雷を「初雷」、春の雷を「春雷」といいます。「春雷」は夏の雷と違って、ひとつふたつで鳴りやむことが多く、そのせいかひときわ大きく響くような気がします。まるで春の号砲のようです。

3月30日_4月04日
【春分 末候】

※季節の風物詩

雪柳 ゆきやなぎ —花—

細い葉や、枝垂れた枝の形は柳のようです。そして、いっぱいに咲きこぼれる小さな白い花は、降り積もる雪。そこで、「雪柳」という名がつきました。
「柳の枝に雪折れはなし」といいますが、「雪柳」は最初から雪を積もらせています。まるで、柳の伝説を誇らしげに語っているようです。

桜貝 さくらがい —風物—

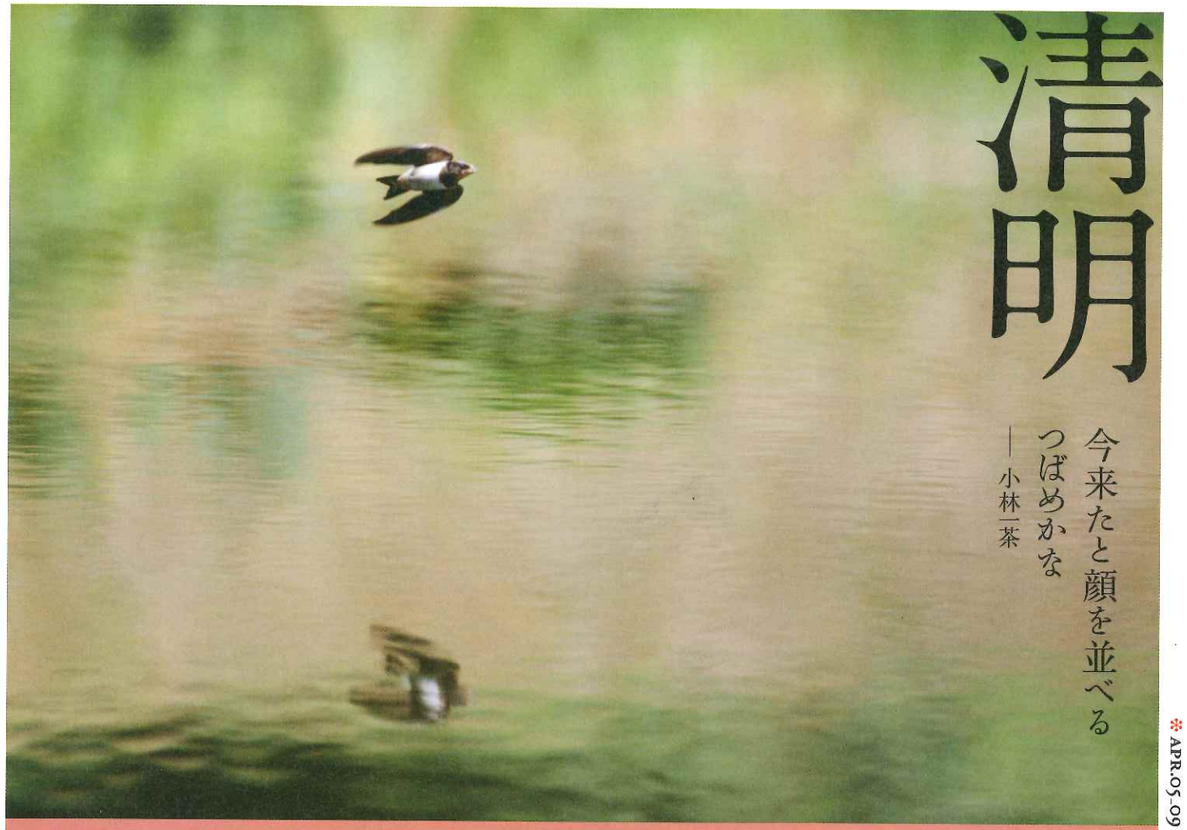
散り落ちた桜の花びらのような「桜貝」。食用ではなく浜辺に打ち寄せられた美しい爪のような貝殻を拾って貝細工にします。季節は関係ないのですが、桜色をしているので春の季語になりました。

蓮華草 れんげそう —花—

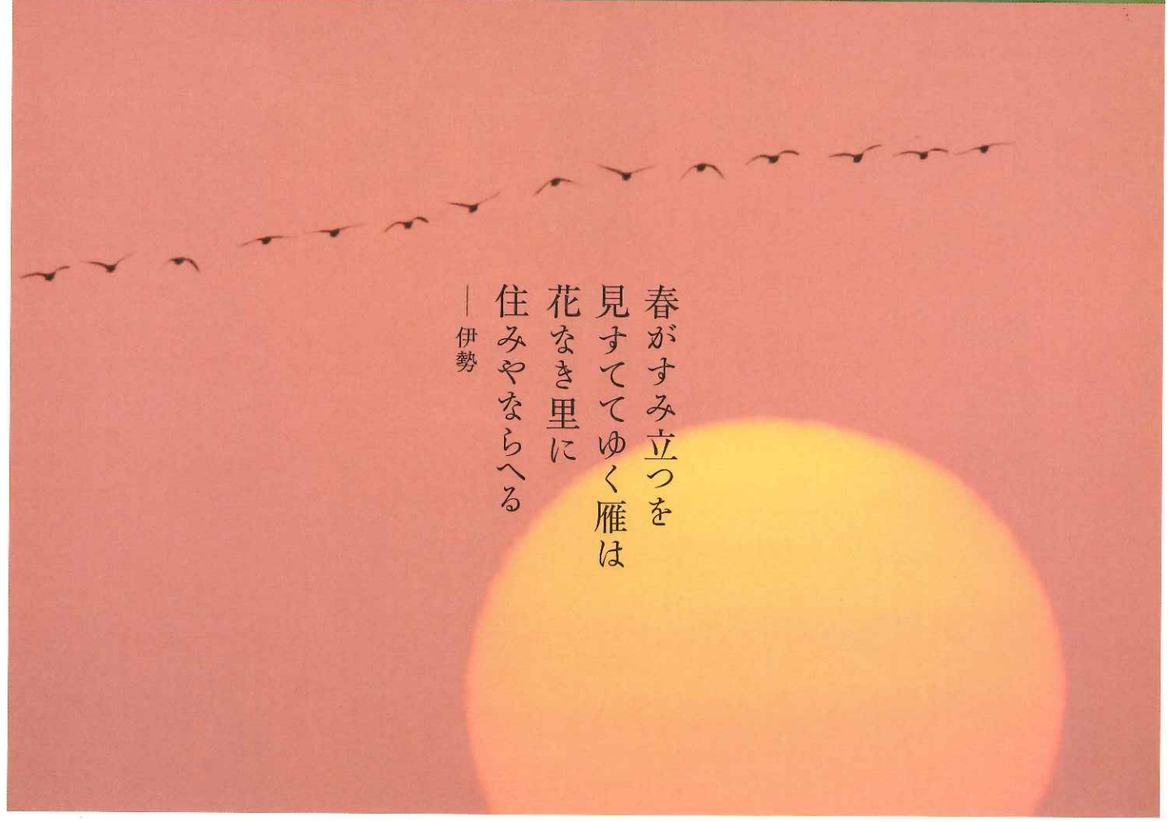
「蓮華」は蓮のこと。蓮の花に似ていることから、この名がついたといわれます。また「紫雲英」とも呼ばれます。
かつて春の田んぼは、濃いピンクのじゅうたんを敷き詰めたように見えたものです。一面に蓮華草が咲いていたからですね。
蓮華草の根には根粒バクテリアがついているため、生きた肥料にしていたのです。そこで、女の子は首飾りを編んで遊びました。

弥生 — 卯月

清明



今来たと顔を並べる
つばめかな
―小林一茶



春がすみ立つを
見すててゆく雁は
花なき里に
住みやならへる
―伊勢

玄鳥至 つばめきたる

鴻雁北 こうがんかえる

玄鳥至

燕が、南の国から日本に渡ってくる季節がやってきました。

「玄鳥」は燕の異名。黒い鳥ということです。燕が巣を作ると、その家は栄えるともいわれます。

土や泥を集めて巣作りをし、飛びながら虫を食べるので、鳴き声は「土食って虫食って渋〜い」と聞きなされてきました。たしかに鳴いた後、いかにも渋そうに「ビィー」といっています。

もう少しすると、夫婦で子育てをするほほえましい姿が見られることでしょう。

鴻雁北

雁が北へ帰っていくころです。

「鴻」は大型、「雁」は小型の雁をさすといわれます。

伝説によると、雁は途中の海上で休むための木片をくわえて渡ってくるのだとか。陸に着くと浜辺に落としておき、またその木をくわえて帰るというのです。ですから、春、浜辺に残された木片は、死んで帰れなかった雁のもの。土地の人は、拾い集めてお風呂を焚き、供養としたそうです。これが「雁風呂」と呼ばれる風習です。

4月05日_09日
【清明 初候】

10日_14日
【清明 次候】

※季節の風物詩

花水木 はなみずき ―花―

一九一二年、当時の東京市が、ワシントンに桜を寄贈したお返しとして贈られたのが「花水木」です。だからというわけではないのでしょうけど、桜の花が散ったあとを受けるように咲き始めます。

秋になれば、真っ赤な実がともるように街を飾り、紅葉も風情のある色合いです。すっかり日本の街に溶け込みました。

花鎮祭 はなしずめまつり ―行事―

ちょうど桜の花が散るころに、たびたび、疫病が大流行したそうです。浮かばれずに亡くなった人の魂がたたるからだと考えた昔の人が、これを鎮めるために始めた祭が「花鎮祭」です。同様に「やすらい花（やすらい祭）」を行う神社もあります。充分楽しませてくれた桜にも、ねぎらいの心を送りたいという思いが重なります。

踏青 とうせい ―行事―

野に出て、青草を踏んで遊ぶことを「踏青」といいます。中国の古い風習が伝わったものですが、やがて、野遊び、山遊びに出かける行事に変わっていったそうです。お花見の習慣も、この「踏青」が発展したものだともいわれます。風習とか行事ではなくとも、この時期のすがすがしい野山を訪ねたくなるのは自然な感情ですね。

鳥曇 とりぐもり ―景色―

渡り鳥が帰るころの曇り空を「鳥曇」といいます。群をなして北へ帰っていく雁や鴨の群。その羽音が風のように聞こえるさまを「鳥風」、そのとき、空に広がっている雲を「鳥雲」ともいいます。

「春に三日の晴れなし」といいますが、出会いと別れの季節でもある、春の心模様を映しているかのような曇り空です。

浅蜊 あさり ―魚介―

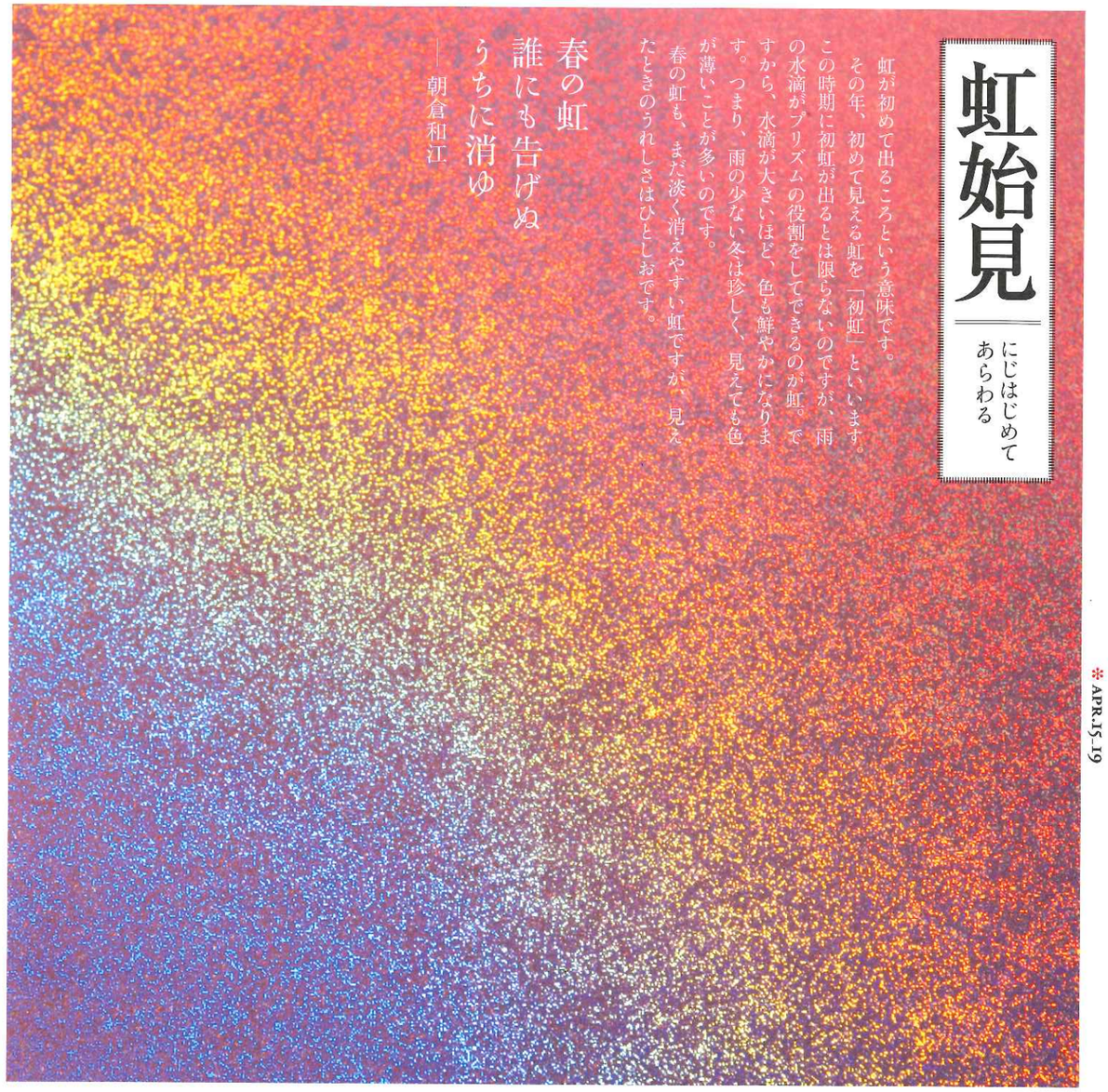
潮干狩りで一番採れる貝が、この「浅蜊」。名前も、水の浅いところで漁るからだといわれます。

牡蠣や蛤といっしょに、古代の貝塚からも出土するというのですから、相当古くから食べられていたようです。今でも、味噌汁の具や佃煮などでおなじみの食材ですね。

チューリップ ―花―

「チューリップ」という名はトルコ語でターバンを意味する言葉に由来します。原産地も、中央アジアや中東地域だそうです。日本に伝わったのは、意外と古く、江戸時代の終わりだとか。当時は「鬱金香」「牡丹百合」などと呼ばれたそうです。

今ではたくさんの品種が生まれ、すっかり春の花壇の人気者になりました。



虹始見

にじはじめてあらわる

虹が初めて出るころという意味です。

その年、初めて見える虹を「初虹」といいます。この時期に初虹が出るとは限らないのですが、雨の水滴がプリズムの役割をしてできるのが虹。ですから、水滴が大きいほど、色も鮮やかになります。つまり、雨の少ない冬は珍しく、見えても色が薄いことが多いのです。

春の虹も、まだ淡く消えやすい虹ですが、見えたときのうれしさはひとしおです。

春の虹
誰にも告げぬ
うちに消ゆ
——朝倉和江

4月15日_19日

【清明 末候】

※季節の風物詩

春の夫婦星

はるのめおとぼし ―星―

「春の夫婦星」と呼ばれるのは「麦星」と「真珠星」です。「麦星」は牛飼い座のアルクトゥルスのこと。小麦色をした星で、働き者の男性像が重なります。「真珠星」は乙女座のスピカ。白く清らかな光を放つ美しい女性のイメージです。春の宵から仲よく空にのぼり、夏になってもいっしょに輝き続けています。

満天星

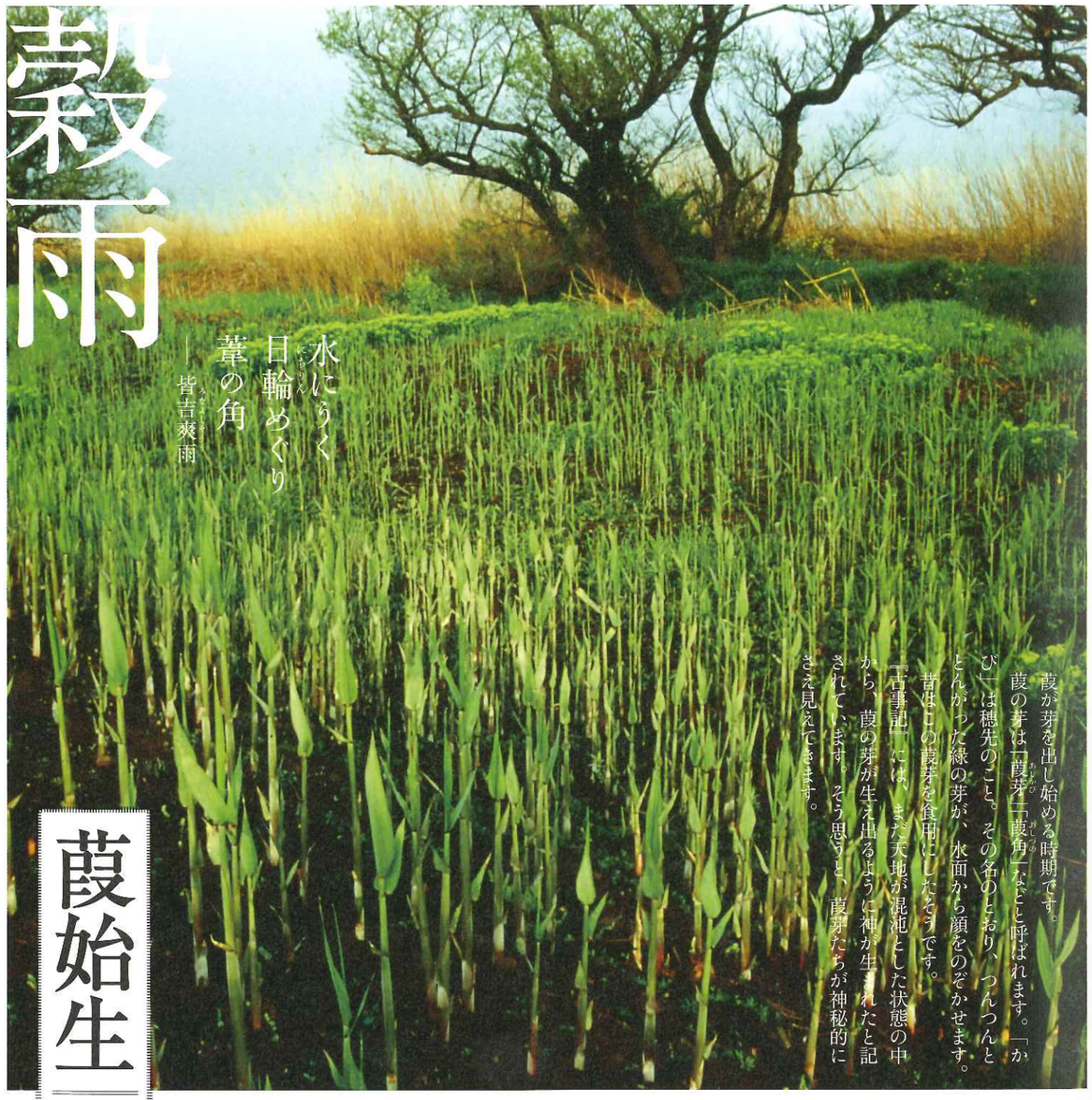
どうだんつつじ ―花―

「満天星」と書く花があります。枝にたくさん、鈴蘭のような白く小さな花を咲かせる「満天星」です。「どうだん」は灯明台を意味する灯台がなまったものだとか。ですから「灯台躑躅」とも書きます。秋の紅葉も見事な深紅で「満天星紅葉」と呼ばれます。

白詰草

しろつめくさ ―花―

「クローバー」の和名です。江戸時代にヨーロッパから渡来した際、ガラスなどの荷物のすきまに詰められていたので「詰草」と呼ばれるようになりました。普通は三つ葉ですが、踏まれたりして生長点が傷つくと、四葉になりやすいそうです。



穀雨

水にうく
日輪(にちりん)めぐり
葦(あし)の角
——皆吉爽雨

葭始生

あしはじめてしょうず

葭が芽を出し始める時期です。

葭の芽は「葭芽(かがび)」「葭角(かかづの)」などと呼ばれます。「かび」は穂先のこと。その名のとおり、つんつんとんがった緑の芽が、水面から顔をのぞかせます。

昔はこの葭芽を食用にしたそうです。

『古事記』には、まだ天地が混沌とした状態の中から、葭の芽が生え出るように神が生まれたと記されています。そう思うと、葭芽たちが神秘的にさえ見えてきます。

4月20日_24日

【穀雨 初候】

※季節の風物詩

若緑

わかみどり ―木―

松の新芽は、松葉の間から鉛筆のように、まっすぐ勢いよくのびてきます。この新芽を「若緑」「松の緑」「松の芯」などと呼びます。やがて、その先にちょこんと赤い雌花、つけ根にたくさんの黄色い雄花が見られるようになります。

若鮎

わかあゆ ―魚―

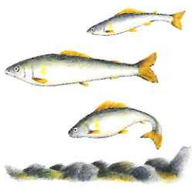
秋に川の下流で生まれた鮎は、海で大きくなり、春を待って川を遡(さかのぼ)っていきます。このころの鮎を「上り鮎(のぼ)」「若鮎」と呼びます。反対に、秋、産卵のために川を下っていく鮎が「下り鮎」「落鮎」。

独特の香りを持つところから、「香魚」とも書きます。また、ほとんどの「鮎」が一年で一生を終えるので「年魚」という漢字を当てることもあります。

頬白

ほおじろ ―鳥―

雀に似た、顔に黒と白の筋のある鳥で、頬が白いので「頬白」と呼ばれます。一年中いる鳥ですが、春から夏にかけて、枝の先や電線などよく目だつところで盛んにさえずります。その声は「一筆啓上仕り候(いっぴつけいじょうつかまつりそうろう)」と聞きなされてきました。



霜止出苗

しもやみて なえいずる

水澄て
籾の芽青し
苗代田
――各務支考

霜も降りなくなり、稲の苗が生長する時期です。霜は作物にとって大敵。ようやくひと安心といったところでしょう。とはいえ、「八十八夜の忘れ霜」といって、立春から八十八日目の五月二日ころ、最後の遅霜が降りることもあるといいます。

稲の苗は、普通「苗代」で育て、二〇センチほどに生長したところで、本田に移し植えます。そのやわらかな若苗色が日毎にみずみずしくなっていくころです。

4月25日_29日
【穀雨 次候】

※季節の風物詩

葱坊主 ねぎぼうず ―花―

葱の花は、昔から「葱坊主」と呼ばれ親しまれてきました。また、葱のたくましい生命力や独特の臭いは、邪気や疫病をはらうとも信じられてきました。橋の欄干につける擬宝珠は葱坊主をかたどったものだといわれますし、天皇の略式の輿である「葱花輦」の屋根にも葱坊主の飾りが乗っています。

躑躅 つつじ ―花―

「山躑躅」「三つ葉躑躅」「蓮華躑躅」「平戸躑躅」……。自生するものだけでも多いのに、園芸品種もたくさんあります。

「躑躅」は、足踏みして歩行の進まない状態を表す漢語。昔、中国で羊が食べたところ、躑躅して死んでしまったことから、こう呼ぶようになったのだとか。藤、山吹と共に、春の終わりをはなやかに飾る花です。

陽炎 かげろう ―兆し―

陽射しの強い日に、立ちのぼる空気が揺らめいて見えることを「陽炎」といいます。これは、直射日光で地面が熱せられて起こる現象。夏でも見られますが、のどかなイメージから、春の季語になっています。

牡丹華

ぼたん はなさく

牡丹に　息を濃くして　近寄れる
――草間時彦

4月30日_5月04日
【穀雨 末候】

牡丹の花が咲く季節です。

「百花の王」ともいわれる牡丹。豪華な花は「富貴草」「深見草」「二十日草」「花王」など多くの異名で呼ばれます。

「牡丹」の「丹」は、赤をあらわす漢字。「白牡丹」もありますが、やはり、真っ赤な大輪の花のイメージですね。楊貴妃にもたとえられました。

俳句では夏の季語とされています。

※季節の風物詩

藤 ふじ ―花―

「二季草」という異名も持っている藤の花。春から夏へふたつの季節にまたがって咲く花の代表が藤というわけです。

藤の花のやさしい薄紫色は、「藤色」として古くから大変好まれてきました。

また、ゆらゆらと揺れる長い花房は、波にたとえられ「藤波」と呼ばれます。

山吹 やまぶき ―花―

「山吹」は古来、春の終わりを彩る花として親しまれてきました。一重咲きと八重咲きがありますが、色ほどちらも、少し赤みを帯びた鮮やかな黄色です。細くしなやかな枝が、風が吹くたびに振れる（揺れ動く）ところから、「山吹」という名がついたともいわれます。

茶摘み ちゃつみ ―行事―

こんもりとした茶畑の緑が色濃くなるころ、新茶摘みが始まります。四月中旬から始まり、唱歌にもあるように、八十八夜（五月二日ころ）がピーク。昔は、赤い襷をかけ、手ぬぐいをかぶり、茶摘み歌を歌いながら摘んだそうです。

卯月 ― 皐月